

# 優秀賞

『九つの、物語』 橋本紡著

国際日本学部 2年 山本詩乃

橋本紡の描く人物はしみじみと愛おしい。彼等はコンプレックスを抱えていたり、素直になれず他人を傷つけたり、時には道を誤ったりしてしまう。その不完全さがある故に、読者は彼等に自分自身を重ね合わせ、共感し、物語に引き込まれていくのではなからうか。

主人公のゆきなは、平凡な大学生。二年前に他界した兄が彼女の前に現れるところからこの物語は始まる。冒頭からありえない展開であるにもかかわらずずっと世界に入り込めるのは、ゆきなと「お兄ちゃん」の互いに対する態度がごく日常の自然で幸せなものだからだ。

「お兄ちゃん」は要領がよく、数多のガールフレンドに囲まれ、凝った料理を手早く作り、派手な花柄のシャツもぼっちり似合う。ちょっと嫌みな人なのかと思いきや、そのじつ優しい情熱家で、誰よりもゆきなを幸せを願っている。一方のゆきは歯がゆいくらい内気で、不器用。「お兄ちゃん」にも兄妹ならではの複雑な思いから素直になれず、減らず口ばかりたたいてしまう。

彼等の等身大のやり取りには、はらはらしながらも思わずほっこりするのだが、物語が進むにつれて関連する本や料理が次々と登場するところもこの本の魅力だ。泉鏡花の名作「縷紅新草」を始め、先生と猫のふだんの日々を綴った内田百閒の「ノラや」、女性と少年の行きかう気持ちを切なく描いた樋口一葉の「わかれ道」など、心惹かれる作品がさり気なく会話に出てくる。また料理はといえば「お兄ちゃん」特製のスパイスたっぷりのトマトスパゲティや、卵とチーズがとろけるクロックマダム、グレイビーソースのかかったローストチキンなど、つついとお腹が鳴ってしまいそうになる。

二人は「お兄ちゃん」の生前とまるで同じように、おいしいご飯を食べ、本を読み、取り留めのない話をする。この共有する時間という大きな愛に包まれて、ゆきな不安や劣等感による心の刺は、ほんの少しづつ丸みを帯びてくる。「お兄ちゃん」との生活は冬の日だまりの様に居心地が良くて、このままずっと続けばいいのにと願うのは、ゆきなばかりではないはずだ。しかし別れの瞬間はあまりにも突然訪れてしまう。

自分と周りに素直になること、生きることを楽しむこと、大切なことはきちんと伝えること、この物語は兄妹への限りなく優しい視点を通し、そう読者に語りかけている。生きていれば、良い日もあるし、悪い日もある。時には道を誤ったり、誰かを傷つけてしまうこともあるだろう。

しかし、悲しみも苦しみも嬉しさも全部持っているほうがきっと豊かで人間らしい。人生はまるで懐の深い料理のようなものだ、そんなあたたかいメッセージがじんわりと伝わってくる。料理をこよなく愛した「お兄ちゃん」は言っていたではないか。

「しょせんはトマトスパゲティだから、なにかを入れすぎても、そこそこおいしくできるんだ。ほら、それもまた、人生みたいだろう」(p. 351-352)